



Data	
監督	森谷司郎
脚本	橋本忍
原作	小松左京『日本沈没』（光文社 カッパ・ノベルス）
出演	藤岡弘/いしだあゆみ/小林桂樹/滝田裕介/二谷英明/中丸忠雄/村井国夫/夏八木勲/丹波哲郎/伊東光一/松下達夫/河村弘二/山本武/森幹太/鈴木瑞穂/垂水悟郎/細川俊夫/加藤和夫/中村伸郎/梶哲也

👁️👁️ みどころ

70年“大阪万博”で浮かれた直後に、日本沈没！1973年に発表された小松左京の原作はどこからが想像？どこまでがシリアス？それはともかく、小説も映画も大ヒット！あの衝撃はすごかった。

それから45年。2018年の日本列島は異常気象に襲われ、台風、水害が相次いだ。これは日本沈没の予兆・・・？近時、国土強靱化基本法等の災害法制が“整備”されたが、日本沈没の事態には対応不可能で、全国民の脱出、移民作戦の立案が不可欠。本作のD2作戦はその参考になるが、さてその検討の必要性は？

橋本忍生誕百年を記念して上映された古いフィルムだが、今日のテーマの提示にも十分だ。くだらないことで国会を浪費して、ホントにこの国は大丈夫？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■小松左京といえばこれ！小説も映画も大ヒット！■□■

去る11月24日未明、2025年の万博開催地が大阪に決定した。そのこともあって、大阪府吹田市の万博記念公園にある“太陽の塔”で毎年行われる、立体的な映像を映し出すイベントの試験点灯が11月29日に行われたが、今年はそこで「祝 2025 万博決定」の文字が浮かぶ演出も行われた。そこでは立体に映像を投影し、幻想的な空間を生み出すプロジェクションマッピングという手法が使われており、今年は「銀河の輝き」をテーマに、塔を制作した芸術家・岡本太郎の作品などが音楽に合わせて次々に映し出されたそうだ。映像の時間は8分間で、一般公開は12月1～2日、7～9日、14～16日、

21～24日の午後5時～9時に映し出されるらしい。

1970年に開催された大阪万博は6400万人が訪れる大イベントになり、岡本太郎がチーフ・プロデューサーを務めた。その時にテーマ委員、テーマ館サブ・プロデューサーとして大阪万博を支え、各種のアイデアを出したのが、SF作家、小松左京だ。大阪生まれの彼は京大文学部に入り、さまざまな経緯を経て1962年に『SFマガジン』で作家としてデビュー。また、多芸で多趣味な彼は、1965年にはベ平連の呼びかけ人になったり、1970年には国際SFシンポジウムを主催したりしている。そして、1973年に発表した長編小説が『日本沈没』だ。これは刊行前には出版社側から「長すぎて売れない」と言われたそうだが、3月に発売すると驚くほどの売り行きを示し、その年末までに上下巻累計で340万部が刊行された。

■□■45年ぶりに鑑賞！メチャ面白いが、こんな批判も！■□■

当時は私の司法修習生時代。勉強しながら（遊びながら？）給料をもらっていた、人生で一番いい時期だったこともあり、私は直ちにこれを購入して読んだが、その面白かったこと！そして、そのバカ売れになった小説は、直ちに映画化。あるブログでは、

- ①改めて今2008年に「日本沈没」を見た第一の感想は・・・何故これがそれほどの大ヒットをしたのか？ 映画として脚本としての完成度は低いのではないのか？
- ②とにかく、話しがゆるい。見ていて日本沈没の緊迫感が感じられない。D計画、D2計画というのもいったいなんなのそれ？という感じ。
- ③とにかく、一つ一つの場面に繋がりが無い。ストーリーが流れていない。誰が考えてもそれってオカシイでしょうというような唐突なシーンがポンポン出てくる。現実にはありえないような話をなぜ平然と脚本に入れているのか？ 大地震や津波、噴火など現実にはありえないような部分が多い作品だが、人間の絡みや本筋の映画のストーリーの部分でありえないことを平然と行っている。

等と叩いていたが、私には本作はメチャ面白いもので、650万人動員という大ヒットを記録した。

そんな古い名作を、フィルムが劣化しているため赤みがかっているという悪条件ながら、45年ぶりに劇場で鑑賞！

■□■冒頭に注目！“わだつみ”から見たものは？■□■

本作冒頭には地球物理学者の田所雄介博士（小林桂樹）を乗せて、小野寺俊夫（藤岡弘）が操縦する深海潜水艇“わだつみ”が深度1万キロメートルまで潜るシークエンスが登場する。田所博士の緊張具合を見れば、大きな危機意識を持って、ある地点に潜っていることがわかるが、さてその危機意識とは？地下1万キロメートルの海底に“ある異常”を発見した田所は、その後も再三調査の必要性を強調し、それが後には“日本沈没”という驚

くべき警告に至るわけだが、この冒頭の緊張感だけでも本作は大成功。

もっとも、下手にこんなことを言い立てていると、かつて北条時頼が支配していた鎌倉時代の1260年に、「立正安国論」が“政治批判”と見なされて流罪にされてしまった日蓮聖人と同じように、田所博士も人心を惑わせ国に無用の混乱をもたらす“反社会的扇動者”と非難される危険もある。しかし、2011年の3.11東日本大震災後、2012年12月16日の総選挙によって、民主党から自公政権への“再度の政権交代”が実現する中で、日本の災害法制は急速に整備された。つまり、①災害対策基本法の改正、②大規模災害復興法の制定、そして③国土強靱化基本法、④首都直下地震対策特措法、⑤南海トラフ地震対策特措法という国土強靱化関連三法の制定だ。また、2018年12月12日付新聞各紙は一斉に南海トラフ巨大地震の震源域で大地震が起きた場合、域内の被災していない地域にも避難を促すことなどを柱とする報告書をまとめたことを報じた。そこでは、巨大地震の想定震源域のうち、①半割れ（東側か西側のどちらかをマグニチュード(M)8以上の地震が伴うケース）、②一部割れ（一部でM7以上の地震が起きるケース）、③ゆっくりすべり（断層がずれて動くケース）の3つを“前兆現象”と定義したうえ、「半割れケース」でも、被害を免れた残り半分の沿岸地域の住民に避難を呼び掛けるとするなど、“最悪”に備える対策を打ち出したことが注目される。

危機管理対策とは本来こういうものであるべきだが、さて、“わだつみ”から見えたものから、田所博士たちはいかなる危機管理対策を打ち出すの？

■□■リメイク版（樋口真嗣版）の意義とその限界■□■

本作から33年を経た「戦後60年」＝2005年の節目の中で樋口真嗣監督の『日本沈没』リメイク版がつくられ、2006年に公開された。それ自体はタイムリーでその意義も大きかったが、2006年は5年余り続いた小泉政権が9月に終わる中、「この国のかたち」のあり方という骨太の視点が薄れていく感があったため、私は「この映画が描く、地球科学的意味での『日本沈没』はまだまだ遠い未来のことだとしても、軍事的意味での『日本沈没』や政治・経済的意味での『日本沈没』は、数十年後という射程距離に迫っているのではないだろうか・・・？」と書いた（『シネマ11』51頁）また、我が国では1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災によって「危機管理体制のあり方」が根本的に見直されたが、その観点からみると樋口版ではその点の研究不足が目立ったため、私はそれを4点にわたって指摘した（『シネマ11』53～55頁）。

樋口真嗣監督は『ローレライ』（05年）（『シネマ7』51頁）で“戦後60年”の検討に大きく貢献したが、『日本沈没』では小野寺俊夫（草薙剛）と阿部玲子（柴咲コウ）の純愛（涙と感動）にウエイトを置きすぎたこともあって、危機管理のあり方にメスを入れるという根本的視点が薄れてしまったのは残念だった。なお、樋口版の評論で私は日本沈没の地球科学的根拠についてはコメントを避けたが、それは私はその分野について全くの門外漢だ

ったためだ。そして、その点はオリジナル版（森谷司郎版、1973年版）の本作も同じだ。したがって、田所博士が顔を真っ赤にしながらか盛んにまくし立てる〇〇論、△△論については、ここでも一切ノーコメントにしたい。

恐竜が減びたのは事実だし、大陸が少しずつ移動して分かれたのも事実だが、それはきっと何千年も何万年もかけてのこと。いくら何でも、本作のように（小松左京の原作が書いているように）1年、2年という単位で日本列島が次々に沈没していくという事態はありえない。しかし、それでは小説にも映画にもならないし、何の警告にもならない。また、文学としても面白くない。文学（小説）はいかなる仮定もいかなる想像もオーケーだし、映画はさらにそれを視覚的に表現する芸術だから、便利なもの。本作を楽しむためには、それを大前提にする必要がある。しかし、田所博士のそんな危機感が山本総理（丹波哲郎）に伝わると、さあ総理は？

■□■D計画とは？箱根の老人の役割は？■□■

樋口版で私は“危機管理体制の不備”を詳細に指摘したが、それとは逆に、本作では山本総理個人の“カン”の良さもあって、総理は直ちに“D計画”を発足させたから、あの時代の危機管理対策としては上出来だ。もっとも、山本総理のこの決断については、既に100歳になるという箱根の渡老人（島田正吾）が政財界の実力者（フィクサー）として動いていたという設定が面白い。

もっとも、これについては、ネット上で見た「LACROIXのちょっと辛口映画批評」では、「箱根の老人・・・これは日本中枢を動かすだけの陰の実力者らしいが・・・一体全体なんなのよ、これって？そんな妙な存在をストーリーの中に入れて何らかの話しの整合性、抑揚を作ろうとでもしたのかもかもしれないが・・・無茶苦茶である。ヤクザ映画やレベルの低い漫画やテレビでにたようなことは多々行われているではないか？」と批評しているが、私はそうは思わない。なぜなら、私は戦後の日本流の民主主義政治の中では、本作が描いた箱根の老人のような人物がずっと存在していたはずだと思うからだ。『砂の器』（74年）では丹波哲郎は今西刑事の役でひたすら犯人を追う典型的な刑事役を演じたが、本作では総理の役で、とんでもない事態の中で、とんでもない決断を迫られる、日本でたった一人の責任者の苦悩と決断を見事に演じている。しかし、そのバックには、良くも悪くもこの箱根の老人の後押しがあったはず。つまり、彼にとっては与党多数の支持は当然ながら、それ以上に自分の決断にはこの老人の後押しが不可欠だったわけだ。

■□■D1計画からD2計画への変更もお見事！■□■

前述のとおり、山本総理がお見事だったのは、田所博士の危機意識を聞いた彼が、その検討のため直ちに“D計画”を立ち上げたこと。そこでは中田（二谷英明）らが大きな役割を果たすので、その進捗状況もしっかり勉強したい。なお、「日本沈没」が現実の事態に

なってくる中、D計画はD1からD2計画に変更されるが、これもお見事だ。D2計画とはまさに日本人脱出作戦計画。つまり、1億1000万人の日本人を、日本沈没までに何千万人、何百万人無事に脱出させるかという計画だが、そのためには、一体何をどうすればいいの？1年や2年でそれを立案し、実行しろと言われても、そりゃとてどもとてども・・・？

ちなみに、樋口版では山本総理（石坂浩二）の陣頭指揮ではなく、まずは危機管理担当大臣として、文部科学大臣の鷹森沙織（大地真央）を任命するという“大失態”をしかけていた。また、中国への避難民受け入れ交渉のため山本総理を乗せた政府専用機が阿蘇山上空を飛行中、阿蘇山の噴火によって山本総理が死亡するという大変な事態になったが、これも死者にムチ打つわけではないが、はっきりいって総理の大チョンボだ。さらに、総理にコトがあった場合、臨時に内閣総理大臣の職務を行う者としてあらかじめ指定されていたのは官房長官の野崎亨介（國村隼）だったが、これが、かなりのワルだったという設定はあまりにひねりすぎだった。そんな樋口版に比べると、本作に見る山本総理は実に立派！

■□■日本沈没をいつ、どのように発表するの？■□■

2018年の日本列島は異常気象に見舞われ、各地に台風、大雨の惨事が相次いだ。そんな中、台風や大雨の気象情報をいつ、どのように発表すべきか、またそれによる列車や飛行機等の運行運休状況をいつ、どのように発表すべきかについての議論と試行錯誤が繰り返された。その結果、今や特に都心部については、早めの防災対策・避難行動の意義が強調され、早めの計画運休の実施も定着した感がある。

しかし、地球科学的に日本沈没という想像を絶する事態が避けられないことが明らかになると、政府がそれをいつどのように発表するのが大問題になる。ちなみに、第2次世界大戦末期のノルマンディー上陸作戦は、いつ、どの地点に上陸するかが大問題で、その日は“Xデー”とされていたし、1941年12月8日に日本軍が行った真珠湾攻撃も、いつ、どこに攻撃を仕掛けるかは、ギリギリまで“Xデー”とされていた。しかし、D計画によって“日本沈没まであと1年！”とわかると、その発表をいつどのようにするのが大問題となった。しかして、山本総理の決断は？

■□■海外移住をいかに？あの当時トランプ大統領だったら？■□■

D1計画は海底の地殻変動が何を意味するかの研究が主たる目的だったが、D2計画は、日本沈没を前提として、いかに日本人を安全に国外に移住させるかの研究。日本は島国だが、その島に1億1000万人もの人間が暮らしているのだから、その全員を安全に国外に移住させるのは至難のワザ。しかし、可能な限り、一人でも多く、少しでも安全に移住させるのがD2計画の目的だ。しかし、内密にそんな計画をいくら研究しても、進展するはずがない。現実に必要なのは、船や飛行機の輸送手段であり、そして、何よりも日本人

を受け入れてくれる国がどのくらいあるかということだが、これを内密に行うのは、ハッキリ言って無理だ。

日本列島に最も近い隣国が韓国や台湾だが、その面積は狭い。それに次ぐ隣国で面積の大きい国が中国とロシア（当時はソ連）だが、東西冷戦が終わったとはいえ、この両国はまだまだかなり異質な国？またインドも国土は広いが暑すぎる？他方、日米安保条約を結んでいる同盟国のアメリカは当然受け入れてくれるだろうが、その人数は？100万、200万はOKとしても、1000万人は到底ムリだろう。ヨーロッパは生活するにはベストだが、遠いし、各国の面積も狭いから、受け入れてくれてもせいぜい各国ごとに数十万人が限度？D2計画の担当者は、きっとそんな計算をしていたのだろう。しかし、スクリーン上でみる、日本沈没が発表された後の国連での議論は？また、山本総理以下日本国首脳、各国詣での成果は？

本作では山本総理の日本国民移住についての人道的見地からの熱意が強調され、各国がそれに応ずる形でD2計画が順調に進んでいくが、もしあの当時のアメリカの大統領がトランプだったら？そしてまた、ヨーロッパの国々が、今と同じように中東諸国からの移民の増大に手を焼き移民受け入れ制限策をとっていたら？

■□『日本以外全部沈没』も合わせて真面目な問題提起を！■□

樋口版『日本沈没』の向こうを張るように、2006年に公開されたのは、『日本以外全部沈没』（06年）。これはタイトルからわかるとおり、『日本沈没』のパロディー版だが、決してパロディーとバカにすることのできない問題提起作だった（『シネマ11』58頁）。2025年の大阪万博開催が決定した今、1970年当時に大合唱されていた「世界の国からこんにちは」の歌が再度注目されているが、『日本以外全部沈没』では、「ニッポン、チャチャチャ」から始まる「日本音頭」が大合唱されていた。まともな陸地が日本しか地球上に存在しなくなった今、その手拍子を取るのはアメリカ大統領をはじめとする各国の首脳たちで、得意げに舞うのは日本国総理大臣だが、そのアイロニーをどのように考えるかが大問題だった。その他『日本以外全部沈没』の問題提起は意外に真剣なもので、考えれば考えるほど難しいものだった。

ところが、同作が公開された2006年と比べても、トランプ大統領が登場し、世界各国の自国ファースト主義が強調され、貿易でも“保護主義”が強調されている今は、それがさらにより深刻になっている。当面はイギリスによるEU離脱がスムーズに進むのか否かが最大の焦点だが、そんな今の時代に1973年版『日本沈没』を観れば、新たに考えるべき問題があれこれと増えていることが明らかになる。したがって、この際新たな『日本以外全部沈没』のパートⅡの企画も誰かに考えてもらいたいものだが・・・。

2018（平成30）年12月14日記